

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成十七年十月一日発行（毎月一回一日発行）  
第十二巻第六号（通巻第一三三八号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第138号

10. 2005

琳派

品川鈴子

重き尻ひきずり惑ふ蠹螂か

琳派なら隅に金箔置く花野

脱稿の寝不足のまま花野行

まけぎらひ稲荷へ七五三詣



暮早き城の古井をみな覗く

吟行の七つ道具に秋扇

芭蕉フォーラムへ招かぬ台風も

突風にさんばら髪の竹の春

もつこすのもたらす新酒「美少年」

船長に先づ注ぐ新酒「美少年」



# 玉 鈴

香川 松井 洋子

置手紙恋文めきて梅雨に入る  
蚊遣香内緒話のくだくだし  
客寄せは隠居の鬪犬城若葉  
鼻唄に水車も和する夏野かな

愛媛 松本 恒子

篝火を闇にゆすれば鶉の逸る  
篝火に先頭きりし勇み鶉よ  
吐かれたる鮎小さきと鶉匠笑む  
鶉飼果つ闇にぽっかり大洲城

愛媛 三浦 如水

薔薇を観る紳士淑女の顔となり  
薫風の窓少し開け自家療養  
朝昼晩葉飲み分け梅雨籠る  
草笛の軍歌 翳々老ガイド  
端居して虚心坦懐山に向く

# 吟

愛媛 三浦 澄江

沈黙はさからふ心桃をむく  
稲光り一瞬心射抜きたり  
能面の秘めたる気迫薪能

兵庫 三枝 邦光

手の甲に額の汗を陶土粘る  
荷を揚ぐる漁夫の深皺玉の汗  
夕焼雲助走三步の逆上がり  
何処いづくよりひびくサックス夜の秋

兵庫 水野 範子

浜木綿は白蠟のごと真夜に透く  
鞭の音堪らず降りる夏の馬車  
確執の解けざるまに梅雨に入る  
夏座敷隣りの猫の足の跡

香川 三橋 早苗

大西瓜居間でごろりと出番待つ  
初恋の人の帰省を知る噂  
硯洗ふ行書草書と行き詰まり  
羽化できぬままに蟬の子土まみれ

和歌山 宮原利代

砂の彫刻に白良の海開き  
足湯にて水着の尻と尻押し合ふ  
扇風機音無く廻る通夜の席

茨城 三輪 慶子

時鳥のまねをしてをり床の上  
雨蛙に息を合はせてしまひけり  
ゴム長の音立ててゆく植田かな  
夏深し祝賀会へと大階段  
羅や乾杯あいさつ長きこと

愛媛 村上 和子

合歡の花朝の化粧ひを怠る吾  
水琴を聴く弁慶蟹爪たたみ  
砂日傘波にはじける児らの声  
浜屋顔皆口開けて日照<sup>そ</sup>雨<sup>ば</sup>受く

大阪 師岡 洋子

大津絵の鬼の看板稲びかり  
落し文字治十帖の径にかな  
滴りの音間近なる籠り堂  
端居して高野の風をまとふなり  
旅三日七味振り込む泥鱈汁

兵庫 八木柊一郎

恍惚と不安大山蓮華咲く  
六甲は臥したるさまに立葵  
人思へば月齢若き梅雨の街  
少年に男の匂ひゆすらうめ  
大声で笑へぬ齡梅雨満月

# 薬草歳時記

(一三七) トウガラシ (蕃椒)

## 八木紀子

小狐の何にむせけむ小萩はら

与謝 蕪村

秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種の花萩の花  
花：と山上徳良は秋の七草に詠み数え万葉集では芽子と記  
され最も多い(142首)。

古人は食や薬に、桃山・元禄期には時絵・屏風・着物の  
意匠に、莖は茶室の床柱や萩垣に筆の軸にと愛された。草  
冠に秋を書いて萩と読み和製漢字の誕生。元は古株から新  
芽が出て生え芽。中国では観賞の対象にならず漢名を胡枝  
花。雅名も多い(鹿鳴草・鹿妻草・玉見草・庭見草・初見  
草・古枝草)。日本には13種程が自生。山野に最も普通な  
山萩を萩と呼び高さ2m程の落葉低木で7~9月紅紫色の  
花が咲き莢を作る。莢は粘り裂けず、冬枯れる。民間薬で  
根(煎用)・葉(茶剤)を婦人の目眩やのぼせ薬に。河原  
でよく見られる多年草で白に紫斑の花薯萩(生薬名を夜間  
門)は止咳・去痰・急性胃腸炎に。庭木に最も美しい紅紫  
の宮城野萩(夏萩)は、日本海側に生えるケハギの園芸品

種で江戸時代に改良されたが種子を滅多に付けない。

全草が薬用で利尿剤・肺熱咳嗽時出血・打撲傷(外用)。  
仙台市の東部にあった宮城野は「古今和歌集」から「奥  
の細道」にも萩の名所として名高いが宮城野萩は自生しな  
い。

木萩は(2m以上)木立ち冬枯れせず白に紫斑花は観賞  
用。堤防や砂防用に家畜の飼料に最適。白萩はサクラソウ  
科「虎の尾」の別称でマメ科の萩ではない。

さてベランダに移植の在所の山萩の一株が翌年に何故  
か8個のプランターや溢れ土に出て、枝(30~150cm)  
を伸ばしベランダはさながら萩の原と化した。9月初めの  
日当たりの良い萩から花が次々と咲き数日後に瞬く間に緑  
の莢で覆われた。へ山萩の花分刻み莢となるへ萩の莢いよ  
よ粘りて服につくへ萩刈りて元の姿におさまれりでした。  
莢を運んだ犯人は鳩。10月葉は枯れ始め、莢は茶色で益々  
粘りを増しまさにひつつき虫の王者。その名を荒地盗人萩  
(外来種)。刈り終えた萩は土手にばら蒔きました。やがて  
この土手一面は萩の原となるのかも…。

参考文献 「花おりおり」 朝日新聞社

「草木花歳時記」 朝日新聞社

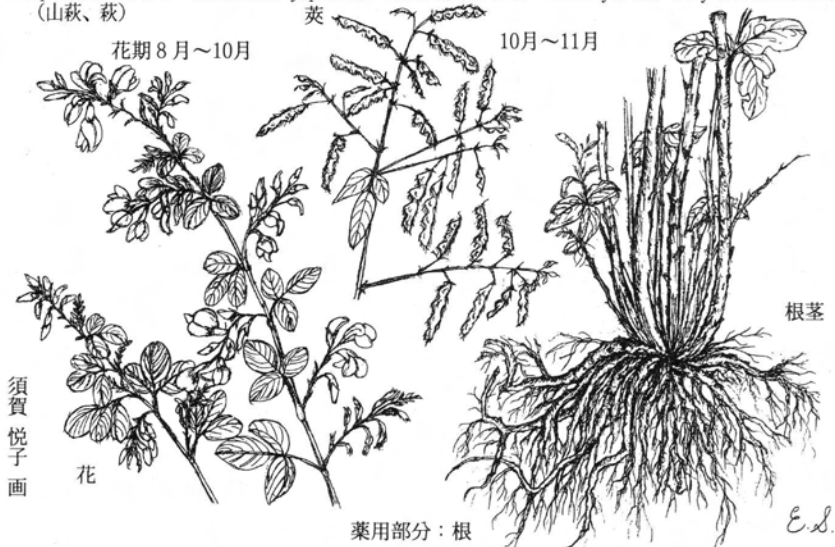
「新日本大歳時記典」 講談社

「原色牧野和漢薬草大図鑑」 北隆館

著者略歴 神戸薬科大学卒 薬剤師

ヤマハギ (ハギ) [ハギ属] (まめ科)

*Lespedeza bicolor* Turcz. var. *japonika* Nakai (*L. bicolor* Turcz. forma *actifolia* Matsum.)  
(山萩、萩)



須賀悦子画

薬用部分：根

萩の風山より地蔵への供華か	萩十日萩大名と謂ひつべし	あらあらと帚のあとや萩の門	萩の風何か急かるゝ何ならむ	庭下駄の重きあゆみや露の萩	萩の露こぼさじと折るをんなかな	萩の風ほつくくと花咲きそめし	杖によりて立ち上りけり萩の花	黄昏や萩に鼬 <small>いたち</small> の高台寺	一つ家に遊女も寝たり萩と月
池田 久恵	阿波野青畝	阿部みどり女	水原秋櫻子	永井 荷風	幸田 露伴	高浜 虚子	正岡 子規	与謝 蕪村	松尾 芭蕉

ぐろっけ

# 鈴の奏

品川鈴子選

七夕の笹振りかざし甲子園 大阪 宮村フトミ

黒南風やエレベーターはシースルー

青葉風並ぶ足湯に他国籍

夏の潮眼下に展け磯料理

箸使ひ碧眼細め冷奴 神奈川 山崎 辰見

冷奴貴船の床に僧ふたり

上下なき立場となりて冷奴

困づくりを仕上げて蜘蛛の腹軽し

我が余生想へば購へぬ熱帯魚 愛媛 篠瀬 照恵

病み伏して只青柿の太り見る

蟋蟀の声ばかりなり狭き庭

喉けしかくるも戦意の失せし兜虫 京都 中崎 敏子

グラジオラス笑い広がる病室に

ごめ連れて翼生えたる遊覧船

児の為に繻く童話梅雨じめり

碧眼に屋根方任す鉦祭

手を組みて祈る幼な等キャンプ場 兵庫 中尾 廣美

雨もよい二階より見る沙羅の花

川べりに半とき屈み螢出ず

七夕に二歳が願ひ五歳にと

十葉の花案内する仮步道 大阪 丸 美砂子

鎧戸を下ろす茶房や梅雨深し

夏鶯寺の石段歩に余る

夏風邪の土産となりし小さき旅

失せ物はさておき黴の古写真 神奈川 永塚 尚代

検査後の渴きいや増す日の盛り

合歡の花 Believe in Future と唄ひけり

糠漬けのかすかに匂ふ日傘の手

よく喋る老舗の鮎屋白暖簾 兵庫 四葉 允子

増水を知らせる櫓青葉かけ

風涼し梵字ばかりの格天井

汀まで亀泳ぎくる梅雨の池

茄子を挽ぐ紫紺の霏こぼしつ 東京 木野 裕美

日焼子の優先座席占め熟寝 うまい



# 秀 鈴 記

巻頭 三句 品川鈴子 評

四句く十五句 中田寿子 "

\*選句は全て 品川鈴子

七夕の笹振りかざし甲子園

宮村フトミ

甲子園ほど熱血溢れる応援風景は他に類がない。さわやかな葉擦れの七夕笹を高々と振るのは高校野球、ひたすらな愛校心の純真な高校生だろう。かつて甲子園球場を造った阪神社長・野田誠三（わが姑の従兄）も天国で目を細めているでしょう。

箸使ひ碧眼細め冷奴

山崎 辰見

異国の人ながら箸遣いが上手で、崩れ易い豆腐を器用に口へ運ぶ。そして冷んやりした柔らかい舌触りと味にもご満悦。思わず碧眼を細くして満面の笑みを湛える。

貴船の川床での、もてなし冥利。

我が余生想へば購へぬ熱帯魚

築瀬 照恵

連合いが先立ち一人暮らす老後では、可愛いペットもむやみに飼えない。

飼い主として何時まで元気に世話が出来るか？神ならぬ身で予測し難い。熱帯魚の寿命と自分の余命を較べる術もない。経済的な躊躇<sup>ためら</sup>いではなく、いとしい命への配慮。

碧眼に屋根方任す鉾祭

中崎 敏子

今は各国より留学や仕事の為に来日し、さまざまなお所に住み、日本のいろんな行事にも積極的に参加している人を見掛けます。夏の盛りの祇園祭にも、手伝ってくれたのでしよう。冬の春日若宮御祭の折も外人さんが、にこやかに行列に加わっているのを見ました。

川べりに半とき屈み螢出ず

中尾 廣美

最近は農業使用が減り、あちこちの小川で螢が見られる様になりました。大阪の万博公園の日本庭園でも、特別に夜間開放し“螢の夕べ”と新聞に記事が出ました。この方は見られず残念でしたが、来年は百の螢の飛翔見にお出かけ下さい。

夏鶯寺の石段歩に余る

丸 美砂子

金比羅さんの石段は約一、四〇〇段、山形県の山寺は約一、一〇〇段、これ程では無いと鶯の鳴き声に誘われ登り出したものの、やはり顎を出してしまった。そうです、神社仏閣詣では体力がいります。

失せ物はさておき黴の古写真

永塚 尚代

探し物の為、あちこちの抽斗を開けていると、若い頃の写真が出て来、ついつい見入ってしまった経験ありますね。屈託なく笑っている自分自身の、その写真少し彩褪せ黴まで付いていたとは…失せ物は見付かりましたか？

風涼し梵字ばかりの格天井

四葉 允子

卒塔婆に書かれた梵字はどなたでも見たことがあると思います。梵字の書かれた高い天井の堂内は思いのほか涼しかったのでしょうか。梵字は本当に独特な書体です。

冷房の図書館老の高軒

木野 裕美

冷房の程よい図書館。椅子も座り心地良く、確り本を読んでいるつもりが、ついついとうとうどこか、高軒となり、知らぬが仏とはいえ、周りの人に迷惑を掛け、膝から滑り落ちる本の音に“はっ”と目覚め、そこは老の厚顔、何事も無かったかの様に、続きを読み出す…でも図書館に行ったりして、好奇心を何時迄も持ち続けることは大事です。

標本のごと守宮観るガラス越し

平川 倫子

ガラス戸にへばり付いている守宮、本当に標本の様です。二、三日同じ所に出現したりしますが、ガラスを隔てていたりすると怖さは無く、むしろいとおしく感じます。井守は水中に、守宮は家に棲み、守宮の句の方が多い様に思えます。(以下略)